

感劇地図

編集・発行：感劇地図編集委員会

印刷：杜陵高速印刷株式会社

発行日

令和7年

3月31日(月)

212

ドラマの撮影セットみたいだな。駅近徒歩10分、キッチン：トイレ・バス別のワンルーム。真ん中に、冬はこたつで、春夏兼用のテーブル。何故か六角形。住人はこの上でご飯もレポートも、化粧もするのだろう。はてな、電灯が、紐引つ張るヤツである。

この話しは、確か、二〇××年の未来の話ではなかったか。今だって音声認識ぐらい普通になっているのに。日本の科学技術の成長は、二周半くらい回ると、結局、必要条件を満たせばよい処に落ち着くのか。

主人公たちが部屋に入ってきた。女子3人。20歳代と見受けられる。彼女らの会話は演技とは思えないほど、ナチュラルだ。中身がないのに繋がる特有な会話のリズム。巧みな脚本、台詞である。だから、観ている側は、属性にもよるだろうが、女子の部屋とガールズトークってこんな感じか：と覗き見しているような、如何わしいような、恥ずかし嬉しのそわそわする感覚だったのではないだろうか。ワタシはかつてそんな時代もあった女子だから、懐かしい感覚。思い出した。青春だ。

ストーリーに戻る。地球をかつて征服した火星、今やその火星に地球人が移住しようとしている。そこでは火星人对地球人の宇宙戦争が始まるようとしている。一方、このワンルームのこたつを囲んでゲームをするのは、見た目優

男の会社員の火星、ビザ宅配バイトの火星、ハーフ、3人の女子。そのうち1人は火星。

この作品は、SF20××年の宇宙戦争勃発とうたいながら、奇抜なアクションやイリュージョンがないところが、面白い。作・演出の水井米氏という。「天国や楽園を目指す『今の境遇からの脱却』なんてものは、面倒くさいもの」。そうなのかもしれない。

本当は、無理な革新より、必要十分条件の揃った状態の維持が、エネルギー的に安定・安泰なのかもしれない。六角形のように。

遠くの宇宙空間では侵略戦争が起こる未来で、紐を引つ張って電気を消し、今日も疲れて、眠る：そんな未来の日常がある。こたつを囲む彼らも「遠くの戦争」について知れば、切実に哀しいのだ。真面目に捉える瞬間がある。

一方、肌に痛みは伴わないし、吸う空気には直接関わらない。変えられない状況に悲しい感情を持ち続ける、悩みの負のエネルギーは柔軟に収束する。彼らはゲームを、今を、楽しもうとする。

進化したはずの未来で、同じような悩みを抱えて、繰り返す。未来都市の片隅での若者たちの恋愛ドラマを観るような感覚になる。愚かしいけれど、変わらない。そんな未来の人間たちを、私はどこか憎めない。

コレは、この感じは、既視感がある。家族から離れ、制約のない一人暮らし。お金はないが、時間

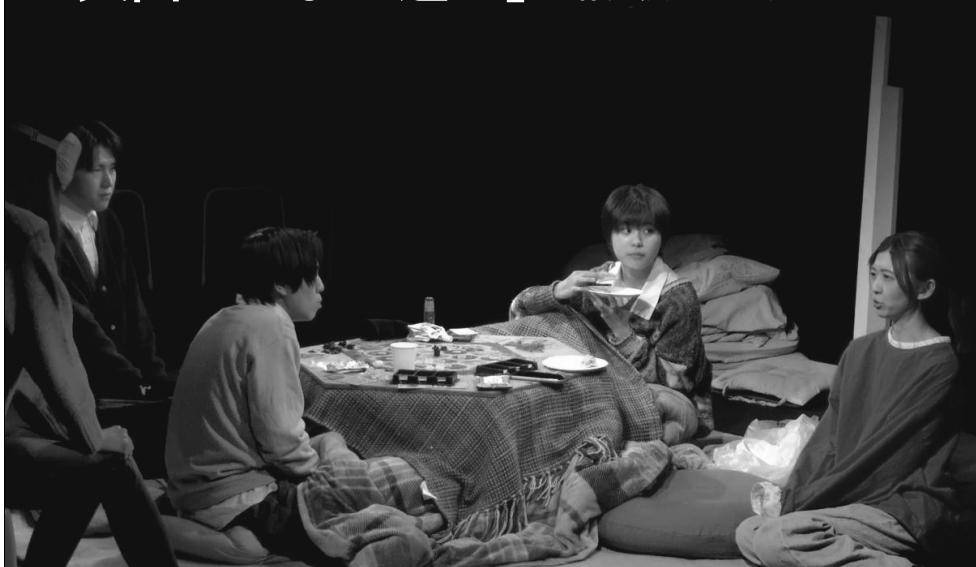
はある。まだ社会や会社での責任や重圧もないが、目指すべき何かを強く意識することもない。モラトリアムな人生の一時期。「生産性」なんて言葉とは無関係でいられた。集まって、喋って、そのまま寝落ちして、泣いたり笑ったり、自分の小さな違和感を悔やんだり悩んだりした。いい時間だったんだな。全然、

「天国」ではないけど、いいときだったのかもしれない。私が歳をとったのだろうか。何故か懐かしい気持ちになった。昔の友人たちに連絡をとってみようかな。そう思いつながら、私は帰った。

2025年2月15日 午後7時開演
いわてアートサポートセンター
風のスタジオ

気丈な空論 #2

「天国にはまだ遠い」 作／演出 水井米



劇評 懐かしい未来 雫石 三佳

まず、忘れがたい舞台であつたことを敬意をもって述べておきたい。2021年以來となるスワンボートの本公演は「多様性」と「生きづらさ」を軸とした舞台として、無二の獨創性に満ちていた。

これらのテーマはあらゆるジャンルで世に溢れかえっている。創作は作り手の心を映す鏡であるから、閉塞感に満ちたこの時代においてはむべなるかな。しかし、ろくろっ首と絡ませようという、その発想はなかった。「いまだにその存在をないものとされているマイノリティもいます。それが、ろくろっ首です!」。妖怪や異形との共生を描いた小説、映画、漫画などは古今枚挙にいとまがないが、本作では完全に存在を無視されているというのだ。それも、ホラーなどの超常的な世界観ではない、現代の日本だ。

あらずじ。ある事情で会社を辞めて実家に戻った煤田永介は、母から従妹の灰澤千代の監視を命じられる。「ろくろっ首の権利を守る会」会員を名乗り、公園で演説活動に明け暮れる千代。先輩でライターの土鳩涙を巻き込み、山奥の小屋に辿り着いた永介が

出会ったのは、コルセットを首に巻いた女、岩戸花林だった……。

キャストは上記の4人。全員、役が見事にハマっていた。スワンボートの本公演では最少人数とのことで、構成も起承転結がシンプル。「人間側」の2人と「ろくろっ首側」の2人が出会う起、記事化などをめぐって動く承、それぞれの過去や心の暗部、葛藤が透けてくる転、世界が変わる結。人格が一見破綻している花林となぜか彼女を慕う千代の有り様は奇天烈。一転、彼女らや永介の懊悩の描写は真に迫り、鋭い言葉で決り合う会話劇に変化する。回想や劇中劇を挟みつつ時系列設定や場面転換の仕掛けがスマートで、観客を置き去りにしない。このひねくれた誠実はとても好きだ。

ろくろっ首は「人間の怪奇趣味を満たすために生み出されたキャラクター」と言及される。余談だが、そういう映画「学校の怪談2」でも首を伸ばして人を追いかけるギャグ要員だった。妖怪の本質からすると不憫な役回りにされがちなキャラなのかもしれない。

スワンボート第4回公演

「この世界に存在しないろくろっ首について」

作・演出 藤原さつき

劇評 「透明を見つめる」 戸舘 大朗

2つの台詞とその対比が、本作を象徴していたように思う。

千代「花林ちゃん人間だよ。どうしたって人間だよ」土鳩「人間じゃないものに果たして人権ってあんのかね?」

千代の言葉は温かな寄り添いだ。どうしようもなくままたらない心を抱えた親友への、恐らく最後の理解者としての献心だ。

土鳩の言葉は冷たい思考実験だ。ろくろっ首の存在を皮肉る台詞は「では人間とは何か」という問いも喚起する。SDGs、多様性の尊重、誰も取り残さない社会。そこにろくろっ首の場所はあるのか。差別と区別、多様性と個性、マイノリティとマジョリティ、生きづらさと「生きやすさ」……。4人の奇妙な人間模様を眺めていたはずが、次第に浮かび上がってくるのは現代社会の様々な二項対立。そしてその境目の曖昧さ(スペクトラム)だ。舞台が終わった後、台詞の数々が違った彩度と色相で表出してくる。

エピソードがとても良かった。物語の導入を辿る構成

で、永介と土鳩が電話で会話を重ね、そして永介は千代の活動に自ら加わる。皆どこか晴れやかだ。見えるようになったのだ。何かが。物理的にも概念的にも取れる。現代への問題意識を社会派の鍋で煮込んで、コミカルとオカルトを振りかけたような一作だったが、後味は不思議なほど優しく、爽やかだった。最後に永介と千代が演説活動をしているのは、青空の下だろう。

マイノリティを議論するとき、社会からいらないことになれる「透明化」という言葉がよく用いられる。藤原主宰によると「完全に透明化できるラインはどこかと思つた。それがろくろっ首だった。ろくろっ首に気を遣う人間はいない」との話。慧眼であろう。創作の世界にしか存在しない、完全に透明なマイノリティ。ありえぬものへの凝視が、かえってマクロにこの普遍的な問題を捉え、思索を深めることを可能にした。

2025年1月18日(土)14時回
盛岡劇場タウンホールにて

* * *

人生で初めての演劇。幼いころ、「ガラスの仮面」を読んだ、自分ならどう演じるかなと想像し、童話の話を勝手にアレンジして脚本にし、休み時間友人と配役を決めて遊んでいた小学生時代を思い出します。そのことから演劇に興味はありましたが、挑戦してみる勇気がなく、演劇の世界に入り込むことなく今まで来ました。

今回基礎講座に参加した

きっかけは、娘たちも大きくなり、自分の手から離れはじめたことから、自分も何かやってみようと思いついたからです。昨年の九月に盛岡劇場で行った、「身体表現ワー



クシヨップ」に参加したのが最初でした。

ワークシヨップでは、ただただ役になりきることだけでなく、身体を使つての表現の幅の広さや、コミュニケーションを取り入れた呼吸法など、たくさんのことを学びました。この二日間が自分にとつてとても刺激的で、まだまだ演劇を学んでいきたいと思ひ、今回の基礎講座に挑みました。

本番が近くなり、劇が形になっていくにつれ、周りの仲間たちの演技との差が明確になり焦りが出てきました。個性を出したかったので、自分の配役のパターンを思い浮か



令和6年度もりげき演劇アカデミー

演劇基礎講座



レポート 基礎講座の感想 藤澤 幸子

ぶ限り変え、いざ練習で挑戦しましたが、緊張でうまくいかないこともありました。みんな一生懸命で、汗をかきながら稽古する姿に、自分も励まされ、その上でありきつて演じることの楽しさが増えていき、少しずつ自信がついていきました。

本番前のゲネプロ。今までの練習を発揮できるようにと張り切っていました。その日から声を出そうとすると痰が絡みかすれ声になってしまひ、うまく声を出せなくなりまひ。今でも悔やみます。本番、負けじと大声をだして乗り切ったのですが、無理して声を出すと、ものすごく高い声になり、焦っているせい

か、早口になっていしまひました。観客はセリフが聞き取りづらかったと思います。アドバイスを頂き、午後からの公演はなるべくはっきり、ゆっくりとした発声を心掛けました。

初めての舞台、本当に悔やみました。もう一つ悔やんだことがあります。客席を一度も見ることができなかったことです。もし客席に知り合い

がいて、自分と目があつてしまつたらセリフが飛んでしまふのではないかと不安で、最後までまったく見ることでできませんでした。観客の反応もわからないままです。少しでも気持ちに余裕ができて、



のびのび演技ができるようになりたいと強く思います。

十一月からの講座、本番まであつという間でした。公演が終わってから、頭の中は「やはりこのセリフの時はこの振りにすればよかった。」と、やり残したことばかり駆け巡っています。また舞台に立つ機会があつたら、今度は悔いの残らない演技をしたいと強く思います。

基礎講座を通して、たくさんの方達と出会い、深い体験ができました。今回参加して最高の思い出を作ることができました。これを機に、また舞台に立ちたいと思つていま



天体望遠鏡第19回公演「おばけのはなし」

作・演出／川辺 健

劇評

「おばけと話をしたかった」

本紙編集委員 佐藤 浄

この作品を見る前日、昔一緒に舞台上に立った人の火葬に参列してきた。私より若く、まだこれからという年齢での急逝。気持ちの整理がついていない中観に来た舞台が、「おばけのはなし」。それだけで色んな思いが開演前の私の中を錯綜していた。

舞台は深夜の病院、救急待合室。娘が運び込まれた

という連絡を受け、ほろ酔いで駆けつけた男。しかしその待合室はどこか変。顔が白い子供が騒ぎ出し、男と話が出来ることにびっくりしてどこかへ行つてしまふ。待合室のベンチには老婆が座り、順番を待っている様子。しかし眠っているようにで反応がない。ただこの老婆、時折姿が消えてしまふ。更に、血まみれの急患が運び込まれてくる。しかも何度も同じシーンが繰り返される。様々なことが起こり、流石に男も異変を感じ出し……。という展開。

パンフレットには、これは2016年に盛岡で上演された舞台の再演だとあった。道理で聞いたことがあった訳だ。とは言うものの、大分書き直しているらしいので新作の感覚だ。

この劇団、舞台装置がえらくしっかりしている。今回も見た瞬間に病院の待合室だ、と理屈なく納得出来る出来映え。上手手前のスペースが建物の外という設定と思われ、板で雑然と囲われた空間が妙な存在感を主張していた。

上演時間は40分だった

が、体感的には5割増しくらいの密度を感じた。ネタバレになるが、冒頭からずっと出ている男が幽霊であり、ずっと待合室に囚われている存在だった。何度も登場した血まみれの急患は、実は男自身が運び込まれたシーンの再現。老婆がこの幽霊の娘であり、引きこもりだった若い頃に男（つまり父）に言い放った言葉の後悔し続けていたのだ。

幽霊である男は老婆には見えないし、男の声も届かない。もどかしい時が過ぎ、老婆が立ち去ろうとしたとき、老婆のしゃっくりを止めようと男の発した「わっ！」という声が響いた瞬間、老婆が立ち止まって、そのまま終幕。本当に声が届いたのか、そうではなかったのか：結末は観客に委ねられたということか。

物語は、パンフレットにも書かれていた「既にない人へ許しを乞うにはどうすればいいのか」という、生きる者が少なからず持つ思いが根底にある。物語の冒頭、地震に襲われるとこ

ろからスタートしていることから、東日本大震災の影響が感じられる、

話としてはありがちな展開（最初に出ていた男の周りの人たちが幽霊のように見えていて、実は男自身が幽霊だった）ではあるが、例えば何度も似たようなシーンの繰り返し、少しづつ変化を入れることで、男の感じる“違和感”を観客に伝える等、細かい演出が施されていた。それに加えて丁寧な言葉が紡ぎ重ねられていて、それによって様々な感情が積層されていくかのような感覚を覚えた。決して奇抜なものではないが、私の心の中に深くゆつくりと染み込んでいくものがあつた。その正体は、会場を後にしてから気がついた：私も、あの舞台上の老婆と同じように、おばけと話をしたかったのだ。早逝したあのひと。舞台上に、私がいたのだ。そんな感覚があつた舞台だった。

2024年10月27日午前公演

北上市文化交流センター

さくらホール 中ホール

杜陵高速印刷 広告

もりげき八時の芝居小屋第191回公演
もりおかアクションクラブプロデュース

「ジュリアス・シーザー the Act」

作/ウィリアム・シェークスピア
脚本・演出/吉田利成



劇評 「挑戦する舞台」 三浦 雅子

ちはこのヒーローを一目見んと集まって来るが、元老院の面々はシーザーを快く思っていない。ローマは王を必要としない共和制の国だが、シーザーは王になろうとしている。いくら民衆の前で3度王冠を拒否したとしても、それは明らかだった。

ブルータスもそう確信する一人だが、シーザーは友であつた。大切な友ではあるが、ローマのことを思えば専制君主になろうとするシーザーには消えてもらわねばならぬ。それには大義が必要だが、その大義がないと苦悩する。しかしついにブルータスは、シーザーに反感を持つ仲間たちと共にシーザーを刺殺する。ブルータスは剣を突き立てられた時のシーザーの発した言葉があつた。「ブルータス、おまえもか」だった。

ブルータスは民衆の前にシーザーの死を告げるとともに、その死が必要であつたと演説する。「俺はシーザーを愛さぬのではなく、ローマを愛したのだ」と。しかしその後で演説したシーザーの側近のアントニーは、言葉巧みにシーザーが公明正大な人物だったと訴える。かくしてブ

ルータスたちは反逆者にされ市民に追われる身となつた。彼らは殺されたり自決したりしたが、ブルータスも側近に剣を握らせそこへ倒れ込む。ローマを思つて大切な友すら殺したブルータス。けれど彼の思いは民衆には届かなかった。無念のまま亡くなつたブルータスを舞台に残して、幕となる。

今回の舞台は60分の短い芝居ながら、シーザーの華々しい登場からブルータスの死までが端的に描かれおり、シーザーというよりブルータスの苦悩と無念さを描いた物語であると感じた。

それは巧みにまとめあげられた脚本と、さらに役者陣のセリフが的確に観客に伝わつたことによると思われる。この舞台では役者たちが実にしっかりとそのセリフを発していたのだ。少々力が入りすぎではないかとも思ったが、逆にそれが古典劇に相応しかつたのではないか。「論争劇に挑戦する」という、もりおかアクションクラブの試みは果たされたと思う。また背景に流れていた音楽はオリジナル作品だったが、さりげなくも重厚感があり、場面、

場面を盛り上げるうえで効果的に使われていた。

ただ戦闘のシーンで登場した大きな包丁のような剣やヌンチャクのようなものが、シアスな芝居にコミカルな雰囲気を与えてしまったし、男性陣の衣装が紀元前のローマを思わせるものなのに、女性陣の衣装は中世のようで違和感があり、これらにもう一工夫欲しかった。

とはいえ「ジュリアス・シーザー」とはどのような舞台なのか、予備知識を持たぬ筆者でも楽しむことが出来たのも事実だ。シーザーの有名な「ブルータス、おまえもか」のセリフがどのような意味を持つのかも知つた。

という訳で、仕事帰りに短時間でお芝居を楽しめる「はちしば」において、古典劇をも楽しめたことはとても有難い。このような企画をして下さり感謝申し上げます。またこの芝居に挑戦した、もりおかアクションクラブにも改めて拍手を送りたい。

2025年2月27日(木)

盛岡劇場タウンホールにて

* * *

今回八時の芝居小屋で上演されたのは、シェークスピアの「ジュリアス・シーザー」であつた。筆者はここ二十数年盛岡の演劇に親しんできたが、今までにシェークスピアを上演した市内の劇団があつたかどうか記憶にない。(もし過去に上演した劇団がありましたら、平にご容赦を)

まだ上演したことのないシェークスピア作品を、もりおかアクションクラブが演じるという。さらに60分という限られた上演時間のなかで、いかにシェークスピア劇をまとめあげるのか。様々な点で興味深い舞台であつた。

芝居は宿敵ポンペイを破つたシーザーがローマに凱旋するところから始まる。市民た



第24回奥州前沢劇場

「カーテンコール」

作／匂坂日名子

演出／佐藤潔

劇評 ずっと一緒に

架空の劇団 及川 麗美

挫折。練習には舞花のみ通うようになった。

回想から物語が始まった。

私は匂坂日名子さんのファンである。彼女の脚本は何回か奥州前沢劇場に採用されており、今回は久々というところ。

「匂坂さんの本なら私も役者として出る！」と以前は意気込んで参加していたが今回は叶わず。そのためこの劇評に多少フィルターがかかっているかもしれない。ご了承ください。

自分の考えを分かち合いたい。でも相手の気持ちも分かりたい、でも分からない。穂は一輪車をやめたいのか、そうでないのか。彼女はクラブをやめることはしないものの、宙ぶらりんのまま半年程練習に行けていなかった。舞花は彼女の本音を知るため思い切って家に向かう。

「大人になってもずっと一緒に頑張ろうね。」
子どもの頃の約束は美しくもあるが残酷だ。小二の時に一輪車クラブ「アールヌーボ」(実際前沢にあるアルスノーバというクラブを基にしている)の見学に行きペアを組んできた穂(みのり)と舞花(まいか)。全国レベルにまで成長したが中三の時に穂が大会時落車し、そこから彼女は

分かった。しかも舞花は穂の家に衝動的にタクシーで向かったが、高校生にしてその料金を払えるくらいには家庭に経済的な余裕があるのだろう(ちなみに千八百円だそう)。

また、舞花は天才型だが穂は自分は違うと考えていたようだ。しかし、コーチ曰く実力はメンタル面で舞花が多少上回る程度で穂も同程度のものらしい。見ていて「そんな悲観的にならなくてもいいんだよ」と言いたくなった。塞ぎ込んでしまったのは彼女が優しいからだだろう。

二人で激しい心のぶつけ合いをして穂はクラブに復帰することを決める。お互いを大切にしていたからこそ、認め合っていたからこそ、あのやりとりができたのだろう。例のアクシデントから穂だけでなく舞花も向き合うことから逃げていたのかもしれない。ペアだからこそ言い合いもばつちりはまっていたように感じた。

匂坂氏の他作品では割とドロドロした感情を描いていたものもあるが、今回は爽やかな系統のものである。その中でもスパツとしていて見ていて気持ちのいいものだった。過去の前沢劇場作品でも同様だ

が悪い人が出てこないと言うところも私は好きだ。田舎の地区のおじいちゃんおばあちゃんのお節介なところも魅力的に描かれていたりするのだ。

話は戻るが、半年のブランクがあり舞花とは実力差を埋めるのは難しいと穂はコーチに言われる。その際今まで練習に來なかつたことを「勝手だね」と叱責されるが、現実を受け入れ穂は練習に励みつつもクラブの年一回の発表会に出ることになる。同時に後輩たちの指導にもあたる。最初は舞花が頼られていたが、指導には穂の方が適性があつたようだ。

「違う形になるかも

しれないし

一緒にもう踊れないかも

しれないけど

今日のことは

ずっと忘れない。」

発表会当日の彼女のセリフだ。二人の演技は非常に美しかった。将来穂はクラブの指導者に、舞花は世界で現役選手として活躍するところまで描かれた。形は違えど気持ちはずっと一緒だ。

今回主役二人は役者(前沢劇場参加者)と、一輪車演技をする演者(アールヌーボメンバー)は別に割り当てられていた。気になったのは無音

での舞台転換が多めだったことだ。一輪車演技との繋ぎのところでも一部違和感があった。それから、クライマックスでの2人のセリフは録音だった。メインで描かれた高校生の時の時系列と異なるため生ではなかったのかもしれないが、もしそうだったら私はもっと泣いていただろう。そこが惜しいと感じた。

が、それを抜きにしても将来の描写後に小二の頃の彼女たちが出てきた場面で感極まっていた。奥州前沢劇場は毎年一回の公演をベースにしているが、奥州前沢小劇場と銘打って不定期に公演もしている。その過去の様子は前沢ふれあいセンターのYouTubeチャンネルでも見ることができ。興味のある方はぜひご覧いただきたい。

2025年2月16日(日)14時
前沢ふれあいセンターにて

感劇地図では、皆様の劇評・投稿・ご意見を広く募集しております。7ページ「インタラクティブ」欄に記載の住所・電子メールアドレスまでお寄せください。

県内劇団短信

岩手に生まれ育った子どもたちに、岩手の素晴らしい童話作家である宮沢賢治さんの作品を読んでほしい、おとなになっても賢治さんの作品にふれてほしい、岩手を出たときに賢治さんの童話の魅力を語れる人になってほしい。そんな思いで始めた「黒猫舎」。

黒猫舎は、子どももおとなも楽しめる宮沢賢治童話の上演を目指し、平成22年4月に旗揚げした女性だけの劇団。大道具や衣装を最小限にし、歌や生演奏ダンスなどを織り交ぜることで、視覚や聴覚をとぎすまし、想像力がかきたえられるような舞台創りをめざしている。

今年度は15周年。これまで、被災地公演や小学校での公演、県内各地の図書館と連携した公演も行った。コロナ禍でも何かできないかと、5本(25作品)のDVDを作成した。第15回公演からは小学生と共に舞台創りを楽しんでいる。

黒猫舎の強みは、2歳から80歳代までの幅広い観客層。「楽しかった!」「子どもに観せたく

黒猫舎(盛岡市)

て連れて来ました。」「芝居を観たら絵本を読みたくなりました。」「孫と一緒に来ました。」「何もない舞台に、いろんな景色が見えました。」と皆さん笑顔で話してくれる。この瞬間がうれしい!

皆さん、宮沢賢治の世界を味わいに、黒猫舎の舞台を観に来てください。

黒猫舎代表 菅原るみ子



Interactive

インタラクティブ

▼連続テレビ小説「カムカムエブリバディ」が地上波のお昼に再放送されています。連続テレビとしては異例の、三世代のヒロインによる百年間を描いた物語です。この文章を書いている時点では、三人目のヒロインによる「ひなた編」(演:川栄李奈)が放送されています。一人目の「安子編」(演:上白石萌音)は第二次大戦の前後を描いているため、非常に辛い描写が続きました。そのため、二人目の「るい編」(演:深津絵里)が始まるまでにリタイアした方も少なくないのでは、とも思います。どうか宇宙人(演:オダギリジョー)が出るまで耐えてください。

▼この物語のキモは、偉人の成功体験が基になることの多い歴代とは違い「何者にもなれなかった」人々が描かれる点にあります。この物語では、主人公から周囲の人々にいたるまで、これでもかというくらい夢破れ、幾度となく将来設計の変更を余儀なくされます。夢破れてもなお続いていく人生の尊さを描いています。

▼その分だけ、名言が多い本作ですが、今回は「ひなた編」からこの言葉をご紹介します。「どこで何をして生きようと、お前が鍛錬し、培い、身に付けたものはお前のもの。決して奪われることのないもの。」一伴虚無蔵(演:松重豊)

▼今号をもって、感劇地図編集委員を退任します。四年間にわたり、盛岡の演劇シーンを観測することができ、たいへん充実

した日々でした。みなさまも、これまでも、これからも感劇地図を楽しんでいただけていたら幸いです。これまでありがとうございました。(古舘)

●本紙記事に対する感想、反論、劇評に対する批評、他、さまざまなご意見を募集しております。本紙に挟み込んであるアンケート用紙を気軽にお使い下さい。

●本通信は、地元の演劇公演の劇評を中心とした演劇通信です。盛岡劇場、市民文化ホール(マリオス)、キャラホール、姫神ホール、いわてアートサポートセンターの各受付・ロビーに置いてあるほか、地元劇団の公演でも無料配布されます。また、個人スポンサー(2口以上)になっていただいた方には1年間無料送付いたします。

●投稿・読者アンケート・感劇地図送付申し込みは

〒020-0873 岩手県盛岡市松尾町3-1

盛岡劇場気付 感劇地図編集委員会

FAX 019-622-1910

電子メール:kangekimap@gmail.com

◆感劇地図編集委員

三浦 隆(代表) くらもちひろゆき(代表代行)

落合 昭彦 佐藤 浄 三浦 貴之 鈴木 優子

安藤 奈津美 福士 史江 古舘 仁志 八木 絵里



月	日	開演	公演団体／公演名	会場	チケット	問合せ先
3	1(土)	14:00	雪の演劇祭2025 フラヌール『奥水町制施行150周年記念講演』 劇団ヨーン「グラスウール」 県南合同チームだべんじゃーず 「なさねばならぬ」	西和賀町文化創造館 銀河ホール	一般 1,000円 高校生以下無料	西和賀町文化創造館 ☎0197-82-3240
	2(日)	11:00 14:00	劇団「Zの風」公演 「楽屋 ～流れ去るものはやがてなつかしき～」	いわてアートサポートセンター 風のスタジオ	前売 1,000円 当日 1,500円	渡部 ☎090-5357-7293 菅原 ☎090-2978-0791
	8(土)	14:00 18:00	*演劇ユニット冷蔵庫ポルカ旗揚げ公演 「二十四世紀カラオケトリップ倶楽部」	いわてアートサポートセンター 風のスタジオ	前売一般 1,200円 高校生以下500円 当日各200円増	reizoukopolka@gmail.com
	9(日)	11:30	令和6年度もりげき演劇アカデミー 演劇基礎講座 卒業公演 「岩山D E 開けゴマ」	盛岡劇場タウンホール	入場無料(要整理券)	盛岡劇場 ☎019-622-2258
	13(木)	20:00	*もりげき八時の芝居小屋 第192回公演 八時の芝居小屋制作委員会プロデュース なんだりかんだり読みがたり Vol.30 13日「父の背中で見た花火」 14日「最後のお便り」	盛岡劇場タウンホール	一般前売 1,000円 当日 1,200円 m-Friends料金(前売のみ) 800円 共通回数券(7枚綴り) 5,000円	盛岡劇場 ☎019-622-2258
	22(土)	14:00 19:00	*カンザスハリケーン 第六回公演 「青嵐」	盛岡劇場タウンホール	一般前売 1,000円 当日 2,000円 高校生以下(前売・当日共) 500円 前売限定通行手形 (全ステージフリーパス) 2,000円 ※一般は別途観劇料(カンパ)必要	代表 ☎090-4318-3623 kansash1021@gmail.com
	23(日)	11:00 15:30	こども劇団みやこデイズ第9回公演 「クランクイン! Ver.Summer ～トイレに流されてタイムスリップした 夏休みがエモすぎた～」	宮古市民文化会館中ホール	一般 500円 小学生以下無料(要整理券)	宮古市民文化会館 ☎0193-63-2511
	29(土)	16:00 19:00	テラコッタパンナコッタプロデュース 優しい劇団の大恋愛 Volume 盛岡 「はやく君に会うための助走」	いわてアートサポートセンター 風のスタジオ	入場無料/事前予約制 (終演後カンパ(投げ銭)募集)	制作部 ☎080-1661-3931
	29(土)	14:00	第19回春季全国高等学校演劇研究大会 出場記念公演 岩手県立一関第二高等学校演劇部 「いつか」	一関文化センター 大ホール	入場無料	一関第二高校演劇部 ☎0191-25-2242
	4	12(土)	*着ぐるみのドレーブ旗揚げ公演 「パフォーミングアーツ 1匹のうさぎへ贈る組曲」	いわてアートサポートセンター 風のスタジオ	一般前売 1,800円 当日 2,000円 大学生以下(前売・当日共) 1,200円	制作部 ☎080-6042-3100
5	12(土)	15:00	こまつ座第153回公演 「フロイスーその死、書き残さず」	奥州市文化会館Zホール 大ホール	全席指定 プレミアムシート 11,000円 S席 8,800円 A席 6,600円 U-25席 5,500円	奥州市文化会館Zホール ☎0197-22-6622
	17(木)	18:30	盛岡演劇鑑賞会 第421回例会 劇団東演公演「獅子の見た夢 ～戦禍に生きた演劇人たち～」	トーサイクラシックホール岩手 中ホール	会員限定	盛岡演劇鑑賞会事務局 ☎019-622-5073
	26(土)	17:00	第49回岩手女子高校演劇部独立公演 「あの日の約束」	ブラザおでって おでってホール	入場無料	岩手女子高演劇部 ☎019-623-6467
	4(日)	14:00	岩手県立一関第二高等学校演劇部 定期公演 「ウキヨガタリ」	一関文化センター 中ホール	入場無料	一関第二高校演劇部 ☎0191-25-2242
	10(土)	13:30	黒猫のしっぽ 第1回公演 宮沢賢治童話の広場 「ツェねずみ」「猫の事務所」「月夜のけだもの」	前沢ふれあいセンター研修室	前売小学生以上 1,000円 当日 1,500円	菅原 ☎090-2978-0791
	10(土)	13:00	*寺山修司生誕90年記念企画 劇団赤い風第86回公演 「犬神」	いわてアートサポートセンター 風のスタジオ	前売一般 1,500円 学生 1,000円 当日各500円増	劇団赤い風制作部 ☎090-3755-5158
	11(日)	11:00 15:00				
	10(土)	13:00 18:00	*第54回盛岡芸術祭参加作品 ライナー・ノーツ#6 「まだここで息をして」	盛岡劇場タウンホール	前売一般 1,500円 学生 1,000円 当日各500円増	ライナー・ノーツ制作部(角館) ☎080-2818-8603

上記表内の[*]印は盛岡市民演劇賞の対象作品です

2024.3.1～2024.5.11